

■ ドル高一服からリスクオフの円高へ…

前回の本欄で『そろそろドル高の流れは一服しておかしくない』と思われるところではあるなどと述べた。実際、ドル/円は週明け 21 日に一時 111.40 円まで上値を伸ばしたところで上げ一服となり、執筆時には 110 円を割り込む水準まで一気に調整する動きとなっている。

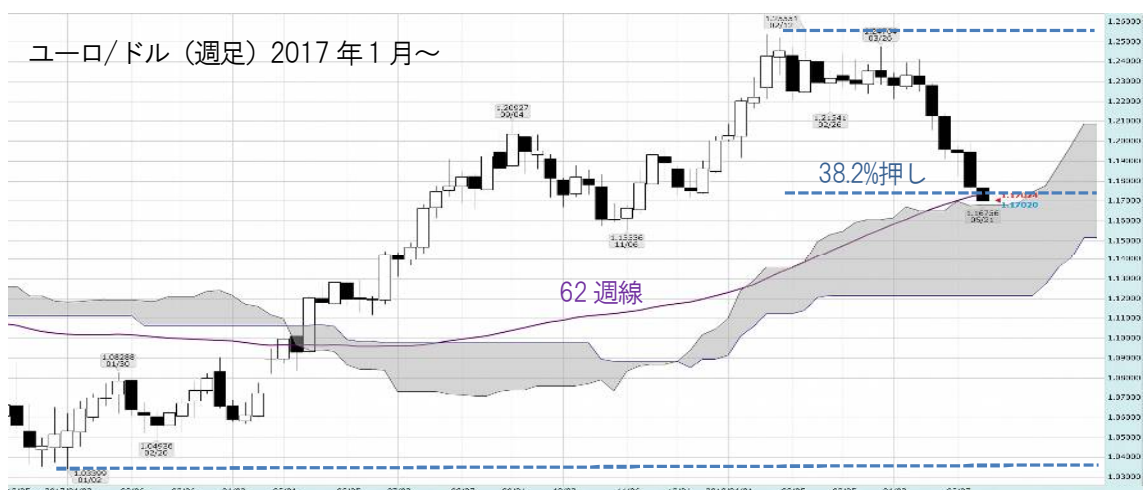
もっとも、これは「ドル高が一服した」というよりも「リスクオフの円高が再び強まってきている」といった方が適当であると思われ、その背景には米中通商協議や米朝首脳会談の雲行きがやや怪しくなってきたことがある。

もちろん、米中および米朝の間で繰り広げられている目下の“鏝迫り合い”は外交に付きモノと言ってよく、本質的には取り立てて大騒ぎするほどのものでもないと思われる。毎度のことはあるが、とかく市場における“政治ネタ”の賞味期限は短めだ。また、昨日～今日は日経平均株価の大きめの下げも全体のムードを悪くしているが、これは「あくまで一部の投機筋による先物主導の仕掛け的な動き」であることも理解しておきたい。

ただ、以前から本欄でも指摘してきた通り、ドル/円やユーロ/ドルがともに複数の重要な節目が位置する水準にまで急ピッチで動いたことから、ここで一旦は「ドルの上昇一巡」となりやすい状況であることは事実でもある。

前回更新分でも触れたが、ことにユーロ/ドルに関しては「極めて重要な節目が数多く位置している水準に到達し、今まさに正念場」と言える状況になってきた。

あらためて下図に見るように、目下のユーロ/ドルは「62 週線」と「2017 年 1 月安値から直近高値までの上げに対する 38.2%押し」の水準を試し、さらに一目均衡表の週足「雲」上限を下支えとするかどうかの瀬戸際にあると言える。おまけに、月足チャートで見た場合には一目均衡表の月足「雲」下限（現在は 1.1671 ドルに位置）と試す格好となっている点にも目を向けておきたい。これら複数の節目付近で「一旦下げ渋る」との見方が優先されるが、それだけに…ひとたび下抜けてしまった場合には、そこから少々下げがきつくなる可能性については一応警戒しておきたい。



一方、足下の円高の動きは「まるで糸の切れた凧」のような状態になってしまっているから少々始末が悪い。ドル/円は昨日（23日）、200日線と21日線を試し、本日（24日）は執筆時までに両線を共に下抜ける動きとなっている。結果、週足では62週線と31週線を順にして抜ける動きとなっており、さらに月足では31カ月線と62カ月線を下抜ける動きにもなっている。

これほどまでに次々と重要な節目を下抜けてしまえば、当面、そのダメージが少々残りやすいと見ておかざるを得まい。さしあたってドル/円は「目先 109.40-50 円処で下げ渋るかどうか」が焦点であり、仮に下げ渋らなければ一旦は 109 円割れを試す展開となる可能性もあるものと覚悟しておく必要もあるものと思われる。
(05月24日 11:10)